"中世のヲロチ" : 古事記のヤマタノオロチ神話の再話

ヤマタノオロチ神話は、スサノオノミコトが八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治する話です。日本最古の書物である『古事記』（712年）に登場し、スサノオが恐ろしい怪物を退治したことがよく知られています。しかし、この映画では、中世の出雲地方で語られた別の説が紹介されています。

この物語は、内戦と社会不安の渦中にあった16世紀初頭の京都に住む、僧侶・リアンによって語られています。その頃、京都では内乱が頻発し、社会が混乱していました。リアンはこの混乱から人類を救う方法を求めて、神々の住む伝説の地である出雲へと旅立ちました。そこで彼は、出雲に伝わるヤマタノオロチ神話の異説を知ることになります。1523年、リアンは本作に描かれる物語を記録しました。

出雲に到着したリアンは、この地の神話に詳しい老人と出会います。リアンは彼にガイドを依頼します。老人はリアンに、ヤマタノオロチはかつて斐伊川の天ヶ淵に住んでいたことを教えてくれます。リアンはまた、近くの山の岩はオロチが死ぬ間際に触れて鉄になったことも知りました。

リアンはその岩を見たいと思いますが、老人から警告を受けます。その昔、その場所を探そうとした地方領主が、仲間に命じて山の草木を伐採させました。それが始まるとすぐに嵐が起きました。その風で大木が倒れ、それがヤマタノオロチの姿となって現れ、男たちは恐れおののいたといいます。

この話を聞いたリアンは、ヤマタノオロチは妖怪ではなく、山の守護神であると信じるようになります。この話は、里山の雑草であっても、すべての命を大切にすることの重要性をリアンに思い出させ、京都に戻った彼は、この神話についての啓示を語っています。